

なぜ 風は／新しい割り箸のように かおるのだろう／なぜ 鳥は／空を滑れるのだろう／なぜ 夏蜜柑は酸っぱいのだろう／
なぜ 海は／色を変えるのだろう／なぜ たった一人の人を愛するようになるのだろう／なぜ 涙は嬉しいときにも出るのだろう
／なぜ フリュートはあんなに遠くまでひびくのだろう／なぜ 人はけわしい顔をするのだろう／なぜ ギターの弦は5本でなく
7本ではなく6本なのだろう／なぜ／なぜ／なぜ／そして 人は なぜ／いつの頃からか／なぜ／を言わなくなるのだろう

(詩人 川崎 洋「なぜ」 童話屋「ポケット詩集」より)

(君は、なぜなんだろうと問えていますか)

時には、見過ごしてしまうことがある。時には、分かったつもりになってしまふことがある。他の人も気づいていると、思い過ごしてしまうことがある。自分が成長していないばかりに、その時の大切さに、気づけないことがある。

1月28日(木)、5年次(3期生)全員で、人文科学、理学・工学、医学・保健、芸術、農学など9会場に別れて課題研究発表会を開催した。4年次生は聴衆者として参加し、5年次生のオーラル発表にじっくり聴き入り、質問をぶつけていた。

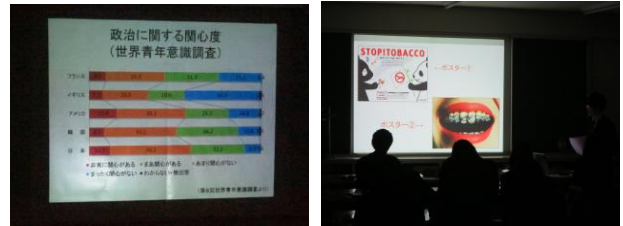
本校では、通常の各教科・科目での学びに加え、学びの目的を支える教育ツールのコアとして、教養教科・科目「かながわ次世代教養」(総合的な学習の時間)が設定されている。それぞれの学習段階では、1年「IT活用」、1～3年「英語コミュニケーション」、2年「地球環境」、3年「伝統文化・歴史」があり、“教養磨き”の締め括りに、4・5年に「課題研究」、6年に「卒業研究」がある。



今回の生徒発表テーマを少し紹介する。

日本人学生の学力とこれからの課題／無意識下の行動の心理／若者の政治参加～アイルランドの同性婚国民投票から考える～／北欧神話と日本神話／地方の過疎化の現状と対策／食糧自給率を上げるには／少年法～死刑制度について～／宇宙はどこまで広がるか／光が分解される条件／無線模型船の制作／水耕栽培とアレロパシー／オノマトペが食品に与える

印象／新薬開発の現状について／ブルーライトの共存／ストレッチの効果～ケガは減らせるのか～／さようなら水問題～海水淡水化で地球は救われる！？～／大切な伝え方、などなど。



かながわ次世代教養、その「教養」とは何かに目を向けたい。他者の力を拝借する。

一 突き詰めると、自分の強さと弱さを知るための知識や情報を総体として「教養」と言うと思う。教養の中には判断力も入っている。「自分はこういうところが強くて、こういうところが弱い。だからこうすべきだ」ということ。痛い、悲しいということをただ言うだけでは他人に伝わらない。自分の苦しみや悲しみをもう一つの目で見られる、それが教養の最も大切なことだ。自分の外側に、もう一人の自分をしっかり置くこと。(姜 尚中、「内外教育」2014年6月24日号)

一 「教養」の決定的に大きな要素は、自らを立てることに必要なのが教養だと思う。揺るがない自分を造り上げること。あるいは、自分に対して則を課し、その則の下で行動できるだけの力をつける。(身につけた知識の量とは関係ない。)自分独りに課したものでありながら、やはり自分の生きる社会との関係の中で、自らと社会との協働関係の中で、見出し、自分に課していくべきものだ。(村上 陽一郎、「あらためて教養とは」(新潮文庫)) ■

教養とは、自分の強さ弱さと付き合いながら、社会との絆の中で揺るがない自分を造り上げること、と受け止めることができそうだ。生徒が取り組む課題研究は、自身の教養の糧にきっと繋がるはずだが、教養として血肉になるものは何たるかを見抜き、自分に課していく、それがいよいよ始まったのだ。

昨年、2期生の課題研究発表の際に、『この研究は単に“調べ学習”として終わりたくなかったので、自分で仮説を立てて検証し、“研究”に値することを目標に行ってきた』というコメントでスタートした発表があったことを鮮明に覚えている。

6年次には論文として研究をまとめ、中等の「卒業研究」として締め括ることになっている。

これからが“なぜ”の始まりだ。平塚中等 校長 鈴木 靖